

教育広報

相

双

第116号

平成29年11月10日発行



『子どもの可能性を信じて』

相双教育事務所長

午来 勝顕

「先生、今年の方が私は満足しています。」

小学校で学級担任をしていた時、読書感想文のコンクールの後にA子から言われた言葉である。

学級の中で、読書好きで特に表現力が優れていたA子が、前年は賞を取れたが、その年は取れなかった時の一言である。

前年の作品は、私が指導を繰り返し、推敲を重ねるうちに、いつの間にか自分の本当の感動や伝えたい思い、使いたい言葉が消えていったのである。

A子にとっては、賞を取るために読書感想文を書いたのではなく、感動を素直に言葉

に表したかっただけなのである。

それは、独りよがりの説得を伴った指導であり、A子は決して納得はしていなかったのである。この言葉は、その後の私の指導方法を変えた。今年の所長訪問は、域内の小・中・県立学校を全て訪問し、授業参観の時間も確保していただいている。

その中で、子どもたちに十分な時間を与え、考えさせたり、話し合いをさせたりして授業時間を子どもたちに返している学級に何度か出合った。時には、悩みながら試行錯誤を繰り返し、楽しそうに学習を進めている姿がとても印象

に残った。

子どもは、伸びる力を秘めている。教師がこと細かに指示しなくても、教え込まなくても、学習の方向付けが明確であれば、自分たちで学習を進めることができる。

今年度、相双教育事務所では、「愛と英知と創造」の基本理念のもと、「英知」については「研ぎ澄まされた知性、学びの創造」をキーワードに「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して取り組んでいる。

ただの知識で終わらせるか、活用できる知恵にまで高めていくか、それらは、子どもの可能性を信じて授業を創り上げていくことと深く結び付くと考ええる。

今後、わくわく、どきどきするような授業に出合えることを楽しみにしている。

編集・発行

福島県教育庁
相双教育事務所南相馬市原町区
錦町1-30☎0244-26-1313(代)
http://www.sousou-e
o.fks.ed.jp

◇教育随想◇

『総合的な
教育環境づくりを』

飯館村教育委員会

教育長 中井田 榮



全村避難も解除され、村に戻ってやっとスタートラインに立つことが出来ました。村は平成三十年四月の学校再開を目指し、村内の飯館中学校敷地内に幼、保、小、中学校を一所に集め、連携・一貫教育を行う計画です。

飯館村教育委員会では、十月に最終就学意向調査を行いました。その結果、第一回目の調査より三十九名増となる九十名の子どもから「村の学校に就学する」という回答をいただきました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

調査の時に同封した資料には、「教育ビジョン」「魅力あ

る教育プログラム」「子育て支援策」、さらに「園舎や校舎などの教育環境」についてまとめております。今後、この総合的な教育環境作りを先生方と共に進め、一人でも多くの子どもたちに就学してもらえるように力を注いでいきたいと思っています。

震災後七年も経ち、それぞれの家庭の事情も違うので、村の学校に就学して欲しいと言っても簡単なことではありません。しかし、それぞれの家の実家のように、実家がしっかりしていれば何かあったときに頼りになると思います。すぐに村内に戻って就学できない方々にも心の支援や安心感につながるよう、本質的な教育をしっかり行っていきたいと思っています。



<学校等再開整備事業俯瞰図>

社会につなぎ

未来を切り拓く

相双の教育

『ASAKATSU』

葛尾村立葛尾中学校

教頭 安部 孝

本校では朝学習の時間を「ASAKATSU」と称して、各種検定の学習と各教科の学習・読書を実施しています。昨年度、生徒達の検定への取組が思わしくなかったことや各種検定の合格率をさらに向上させること、またアクティブな学びを実施するために、朝学習を読書だけではなく、生徒の思考を活性化するように取組にしようと考えたことから始めました。

まず、各種検定の学習については、年間計画に受検日を設定し、約二週間の準備期間に全員が学習します。学習の方法はタブレットPCに対策アプリを入れ、各自が教室前方にあるラーニングスペースで学習します。生徒同士が教え合い、また先生方も生徒達の周囲で助言等を行うような環境にしています。本校では、

卒業までに各種検定の三級以上の取得を目標にしています。

検定の学習以外の時間は、各教科の学習を計画しました。四月中は現職教育担当が準備したクイズやなどを解かせ、朝の思考を活性化させるような取組を行い、慣れたきたら、生徒たちにクイズを考えさせ、先生の役目をさせました。その結果、うまく進んでいなかった生徒がその後再挑戦したいと申し出たり、先輩の進め方を参考にする生徒が出てきたりとプレゼンテーション能力が向上しています。先生方の手を離れ、生徒の自主的な活動になるのが理想形と考えています。

最後に、タブレットPCやデジタル教科書を活用して学習することで、あきらめが早くなる弊害が生まれやすいように感じています。もつとじっくり考えて活動し、自分の意見を深めさせるためには、読書量を増やすことが一つの解決策になると考え、「ASAKATSU」の中に読書の時間を増やしていくなどバランスを検討しています。また家庭学習に意欲的に、自立して取り組む習慣が身につくよ

うに、「ASAKATSU」の中で自信をつけさせたり、各教科の楽しさをさらに感じさせたりする取組を行っているところです。こうした生徒たちの様子については、本校ホームページに随時掲載していきますのでご覧いただき、ご指導いただけると幸いです。



<ASAKATSUの様子>

『おもひの木プロジェクト』 震災から大切な命を守るために

福島県立新地高等学校

教諭 大越 徹也

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生しました。新地高等学校では、在校生一名、十日前に卒業式を終えたばかりの卒業生八名が津波の犠牲となりました。

本校では、震災で亡くなられた方々を追悼すると共に、震災を風化させず、今後も起

こりうる災害から命を守るために「おもひの木プロジェクト」を立ち上げました。今年の三月十一日に、本校の中庭に「おもひの木」と名付けた沙羅の木を植えました。月命日には黙祷を捧げ、新地駅前や地下道の清掃を行っています。また、震災当時の記憶や、亡くなった方々への想いを手紙に託し届けていただくことを目指し、「おもひの木ポスト」と名付けて、想いを募ることも始めました。

今年度よりこの活動を本格的にスタートさせ、宮城県山元町へ震災を経験した方々の話を聞きに行くことや、新地町の「やるしかねえ祭」では活動報告や募金活動を行いました。今後は、過去の震災の歴史に関する調査と東日本大震災で被災した語り部の方々から話を聴く活動を中心

に、岩手県や宮城県などの被災地の高校生や地域の方々と繋がり、地元の高校生だからこそできる活動を行っていきます。新地町の震災の歴史について調べた内容に関しては、十一月に奈良大学で開催される全国高校生歴史フォーラムにおいて、発表する機会

もいただきました。また、来年一月には宮城県の石巻市や南三陸町の方々からお話を伺う予定です。

おもひの木プロジェクトの活動を通して、生徒や被災された方々の震災に対する想いを後世へと伝えようと共に、生徒自身が未来に向かって歩み続ける力を育成することができると感じています。福島県の沿岸部だからこそできる活動であり、携われることに誇りをもつて取り組んでいます。

本校では引き続き、被災された方々の経験や震災への想いを募っています。詳しくは新地高等学校ホームページをご覧ください。本校の教育活動に今後ともご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。



<おもひの木の植樹>

『飯館村三小学校の 運動習慣化への取組』

飯館村立臼石小学校

講師 今井 将太

草野・飯樋・臼石小では、震災以来、川俣町の仮設校舎で学校生活を送っています。スクールバス通学や制約のある日課など様々な制限があるため、運動する機会が少なく、体力がつきにくいことが本校の課題です。その課題解決に向けて、運動が習慣化できるように学校全体で次のような取組を行っています。

「朝マラソン」では、朝の短い時間を活用して持久走に取り組み、心身を目覚めさせ、活力ある一日をスタートさせています。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走るのが嫌い」という消極的な思いも持っています。したがって、今後は、個人の目標を具体的に設定することや個人の記録を合計し、学級全体の記録と関連させて目標に進むことで、さらに体力を向上させ

ていきたいと考えています。

「運動身体づくりプログラム」は、体育科の授業の導入において、全学級で取り組むだけでなく、業間にも全校生で実施しています。さらに本校では実施するだけでなく、「下位児童に対しての声かけや、種目ごとの指導の仕方が難しい」といった教員の意見もあつたことから、研修会を行いました。体育部以外の教師が全校生に適切な言葉かけをできるようになり、指導力の向上を図ることができました。今後は、教師一人一人が各動作が主運動のどの動きにつながっているのかを理解するとともに、競争重視にならないように留意して実践していきたいと考えています。

「業間運動」では、時期に合わせて取り組む内容を変えています。一学期は新体力テストに向けた基礎体力向上や運動身体づくりプログラム、二学期は持久走記録会に向けた「村巡りマラソンカード」を活用した全校生での五分間走、三学期は縄跳び記録会に向けて、全校生で持久跳びの練習と校内ランキングを活用

した各種技に挑戦しています。

以上の取組を通して運動の楽しさや喜びを味わわせ、体力の向上と運動の習慣化を図っていききたいと思っています。



＜朝マラソンの様子＞

『北から南から』 新採用教員として 考えることゝ

相馬市立大野小学校

教諭 川崎 桂子

四月に辞令を拝受してから、半年が過ぎました。年度当初は、新しい生活に慣れず、落ち込む日もありました。しかし、同僚の先生方に助けていただいたり、同じ初任者の仲間と研修を受けたりする中で、少しずつ自分なりの仕事のリズムをつかんでいくことがで

きるようになりました。

現在、三年生の担任として、試行錯誤をしながら学級経営に取り組んでいます。単学級で学んでいる子ども達は、これまで二年間、同じメンバーで生活してきました。そのため、お互いの性格はある程度把握しています。そのことが、学校生活の中でよい影響を与えることもあれば、そうでないこともあります。まずは、私自身が率先して、子ども達のよいところをたくさん見つけ、認めていくことを心がけています。それが、子ども達にとって友達の新たな一面を知ることにつながり、お互いの関係が深まっていくと考えるからです。

今後も、研修を通し、教師としての専門性を身につけながら、子ども達がお互いを認め合い、自主的に行動することができるよう学級を目指していきたいと思っています。

南相馬市立原町第二中学校

教諭 松崎亜希子

慣れない土地での生活に不安を抱いて原町二中に赴任してきましたが、クラスの生徒

たちとのにぎやかな生活が不安を吹き飛ばしてくれ、楽しく充実した日々を過ごしています。

今年度は、様々な研修に参加することができ、多くのことを学ばさせていただいています。研修に参加して、より多くのことを吸収するためには、自分から意欲的に発言することが重要だと実感しました。

そこで国語科としては、一人一人がしっかりと自分の考えをもち、それを相手に伝える力を身につけさせたいと考え、話し合い活動を授業に積極的に取り入れてきました。最初は、話し合いとしてうまく機能していませんでしたが、最近では活発な話し合いが行えるようになり、課題の解決がスムーズになつてきました。

今後も継続して指導を続け、考えを深め合えるような話し合い活動ができるようにしていきたいと考えています。そのためにも、一人一人が安心して発言できる、お互いを認め合うことができる学級になるように努めていきたいと思っています。

相馬市立日立木小学校

養護教諭 渡邊 舞香

授業終わりのチャイムと同時に「先生、先生」と子ども達が保健室へやってきます。委員会活動や手足を擦りむいた子どもなど来室理由は様々ですが、休み時間の保健室はとても賑やかです。私は、子ども達にとつて保健室を『心と体が元気になる場所』『そして『健康に生きる術を学ぶ場所』にしたいと考えています。そのため、多種多様な訴えをしつかり受け止めるとともに複眼的に症状を把握し、迅速かつ適切な処置を施すことで、来室した児童が笑顔で教室へ戻れるよう努めています。

養護教諭の魅力は、児童の成長に携われることです。う歯処置率の掲示物の前で「むし歯治したよ」と誇らしげに話す子や教材掲示に足を止め熱心に見入る子など向学心に燃える子ども達。そんな子ども達に向き合いながら、日々やりがいと使命感を感じています。

職責遂行に努めたいと思います。

福島県立ふたば未来学園

高等学校
教諭 本多 裕樹

H29インターハイは、いろいろな意味で特別な大会でした。一つ目は、ふたば未来学園高校が単独で出場する初めての全国大会であったこと。二つ目は、前任者である大堀均前監督が退任されて初の全国大会であったこと。そして、三つ目には、自分自身がチームを率い、教諭として全国大会に臨んだこと。例年とは、まるで違う大会かのように感じました。

そんな思いを感じつつ迎えたインターハイでは、六種目中五種目制覇という史上初の結果を残すことができました。

この結果を残せた理由を考えてみると、チームとチームに携わってくれたすべての人を含めた「Team TOMIOKA」にあると思います。

具体的には、「①指導者間で密な連携や協力をして、一人一人がチームの柱として大会に当たってくれたこと」、「②選手一人一人が自分のやるべきことに責任を持ち、闘い続けたこと」、「③OB・O

Gが強化練習会に駆けつけ、直接指導に当たってくれたこと」、「④携わってくれたすべての人が全力で応援・協力してくれたこと」、そして、「⑤チームが一丸となり、同じ目的（全種目制覇）を持って闘えたこと」が今回の結果につながったと思います。

相双の復興・創生を目指して

『TaiKobu』

福島県立相馬高等学校

教諭 伏見 裕樹

相馬太鼓部は、今年で創部二十年を迎えました。相馬野馬追宵祭りで奉納演奏をしたり、そうま市民まつり、どんと祭などでも演奏を行ったりと、各所から演奏依頼があれば可能な限り披露させて頂き、地域との関わりを大切にしながら活動しています。また、コンクールにも出場しており、昨年度は東北太鼓ジュニアコンクール第四位の成績を収めました。

それらのほぼ全ての機会において演奏しているのが、相馬太鼓部の代表曲「相馬の宵」です。相馬盆唄の笛とやぐら太鼓の音に合わせて楽しげに踊る様子、祭りの後の過ぎ去る夏を惜しむ様子を、高校生笑顔と若さみなぎるパワーで表現した曲です。相馬太鼓部には太鼓経験者がいないため、その情景を「ドン」としか音の出ない和太鼓でお伝えできるようにするまでには、血と汗と涙の練習の日々が続きます。

高校に入学して初めて太鼓を叩くことになる新入生は、馴れない手つきでバチを握るため、ママができたり、指をバチで叩きケガをしたり、腕の振り上げが続くので筋肉痛や腱鞘炎を起こしたり、夏の暑い中の練習で熱中症になる生徒が出たり…運動部にも引けを取らないハードさです。

また、曲のセンターやパートを決めるため、運営や審査がすべて生徒だけで行われる「TKB」という一発勝負のオーディションもあります。

TKBの直前の一年生は、普段にも増して必死に練習し、その一年生を鍛え上げるために、先輩は付きつきりで指導します。そうして選ばれたメンバーがさらに練習し、演奏を披露することになります。

そこには辛かったり悔しかったりした思いを乗り越えながら、心身共に成長していく生徒の姿があります。

県内では、地域で太鼓団体を組織し、子供の頃から太鼓に触れ、優れた演奏をする団体が増えていきます。そのため、今年度のコンクールでは、良い順位を残すことが出来ませんでした。しかし、短い高校生活の中で心身共に成長し、出せるようになった力強い「ドン」という太鼓の音が多く、皆様の心の支えや地域のためにも少しでも貢献できれば幸いです。



＜市民まつりでの演奏＞

◇編集後記◇

相双の未来を担う子どもたちの取組や教育活動を中心に紹介させていただきました。寄稿していただいた皆様に心より感謝申し上げます。